

■ On-Air 3000 ユーザーレポート

株式会社京都放送 様

On-Air 3000

ラジオ 3 スタジオを On-Air 3000 で更新



■ラジオ3スタジオ・サブ

株式会社京都放送
送出グループ
深尾 康史・藤村 稔治



くつろぎ系の内装

1980年の社屋移転から、長らく親しんできた第3スタジオを更新、4月から運用開始しました。26年前の4月に、このスタジオから移転第一声を放送し、更新もこのスタジオから始める事となりました。

マスター系の更新は2001年にシステムと中継回線そしてスタジオ空間回線をデジタル化、スタジオ録再素材もサーバー化しましたが、スタジオ卓はCDの無い時代のもので、改修と延命対策で利用してきました。今回一新しましたスタジオは、くつろぎ系の内装とし、ゲストやタレントさんの評判も上々です。

選択の経緯

5年間ニュースサブでOn-Air 2000M2を利用しており、信頼性とアナログ的な操作性・視認性の良さは認識していました。

今回の更新では、4人トークの生ワイド番組を最大想定とし、CH数のほか足りない機能があり、On-Air 2000に近いOn-Air 3000の導入を発表以来検討していました。

更新時期の決定と製品発売のタイミングが合い、パフォーマンスの点からも他機の検討もなく決定致しました。



■くつろぎ系の内装



■ゆるやかにラウンドしたデスクデザイン



■すっきりまとめられたデスクセンター



■アナブース

設計コンセプト

- ・シーンメモリーを利用し、多用途に利用できるスタジオ（生のベルト番組、生中継の加工処理、収録收音、編集等、スタジオ機能等）
- ・音声メディアスタジオとして長期利用可能なシステムとしワールドスタンダードな仕様を採用、時間投資コストの軽減を念頭に機器を選定。
- ・入出力 AESフルデジタル基本（モニター等除く）。スタジオ内 110 Ω、室間 75 Ωとする。
- ・アナログ領域ではケーブル 10m 以内とし高品位な線を採用する。
- その他、テープレスの冗長性を高めるための

DAW 増設、スタジオ内情報 Display の充実、パッチペイレス（ルーター化）、静音性と居住性を両立したスタジオとサブ、等々、高品位、汎用性、信頼性を考慮した仕様としました。

運用を初めて7ヶ月

設計コンセプトもほぼ満ち、音声メディアスタジオとしてクオリティの高い作品づくりが可能となりました。On-Air 3000 はハード・ソフト共に特にトラブル無く稼働中です。運用以来、使い勝手等で改修を重ねていますが、わがままな要望にも、ほとんどの事が設定変更で対応で

きているように思います。また、同スタジオは主にデレクターがミキサーを兼ねて利用することが多く、対話型吊り 1 本マイクから個別 4 本マイクに変わるなど、機能には問題の無いものの習熟に少し時間が必要な場面もありました。

今夏、生放送中継サブで 1 ヶ月弱利用しましたが、即応性や現場入力 CH 数、機能も特に問題なく終えて、近々生ベルト番組に利用の予定です。困った事を言いますと、これから各スタジオの更新計画を進めていく上で、評判の良い On-Air 3000 以外の操作性と機能の機種を検討できにくくなってしまったことでしょうか。